

# 夕霧と子供たち

—子沢山な父の視点を通して—

はじめに

田辺玲子

本稿は源氏物語の子ども描写の中でも異彩を放つ「横笛」「夕霧」の夕霧の子ども描写の特徴を吟味し、それが「まめ人夕霧の恋」と、どう関わっているかを明らかにしてみたい。また「子沢山な父夕霧」の観察眼を通して幼い薫や二の宮・三の宮（匂宮）が、どうとらえられ、どのように相互比較されているかという点も考えてみたい。さらに源氏物語における子沢山の描かれ方をも検討してみたい。それは、子の少ない主人公光源氏と「不生女（うまずめ）」のヒロイン紫の上の設定の対極にあるものとして、物語全体を味わう上でも重要な要素をはらんでいると思われるからである。引用は小学館古典文学全集で、括弧内に巻名と頁数を示した。傍線は筆者によるものである。

## 一 「横笛」「夕霧」の夕霧の子どもたち

### （子沢山の家庭）

夕霧にとって、雲居雁との間に築いた家庭は「明け暮れ人繋ぐてももの騒がしく、幼き君たちなどすだきあわてたまふ」（横笛340）というものであった。柏木を亡くした悲しみにこもっている一条宮を訪れ「いと静かにものあはれな」雰囲気に浸った夕霧が、自分の邸に帰ってくる

ここでの夕霧は、自分の邸にあるもの（愛妻と大勢の子供）に満ち足りた幸福感を確認することはなく、我が家に欠けているものの方を強く意識している。それは、夫柏木に先立たれ、忘れ草となる子を一人も持たぬ未亡人落葉の宮がかもし出している哀愁に満ちた雰囲気であり、雲居雁が結婚後は少しも手を触れようとしない、ひそやかな琴の音色である。森藤侃子氏は「雲居雁にとっての不幸は、夫が彼女にとってないものねだりするに等しい、しめやかな情趣と、ものはかない侘住居の女二の宮に惹かれた事にある」（注3）とするが、二女のかもし出す雰囲気の違いには、子供の有無が大きく関係していると思われる。

また、後藤祥子氏に皇女との結婚には「父帝の強力な意志のもとで、きわめて政治的に取り運ばれる、花婿にとって栄光の降嫁もあれば、父帝の意向とほとんど無関係に、皇女の人物本位で秘かに行われる結婚もあった」とあり、柏木の理想を前者とすれば、夕霧と落葉の宮の結びつきは後者の典型という説（注4）がある。そして「後者にはむしろともに本質的な王統優位の思想が流れているといえる」（同）とする。夕霧にとっての落葉の宮の魅力とはやはり雲居雁や藤内侍と違い、皇女であった点が大いであろう。しかし柏木と異なり、女三の宮は批判的に観察しているのだから、やはり女三の宮にはない魅力を感じたのである。さらに後藤氏は「皇女は結婚しても概して寡産」（同）であると指摘する。死別した前夫柏木との間に子を設けることのなかった落葉の宮だが、結局夕霧の子を自ら産むこともなかった。紫の上が明石の姫君を養女にしたように、夕霧のもう一人の愛人藤内侍の産んだ六の君を養育することになる。夕霧の「まめ人の恋」にはこのように「寡産の皇女の結婚」という一面もこめられているのである。

と「格子など下ろさせて、みな寝たまひにけり」（同346）と、雲居雁の不機嫌が露骨に感じられるばかりで、風情のない有り様である。

夕霧は「君たちの、いはけなく寝おびれたるけはひなどこかしこにうちして、女房もさしこみて臥したる、人げにぎははしきにありつる所のありさま思ひあはするに、多く変りたり」（同346）と、子沢山のわが家のにぎやかな寝室の光景に、家庭の繁栄や幸福を確認するよりはむしろ一条宮のしめやかな情緒との相違を実感している。

源氏と葵の上の間の一人子夕霧自身は、このように家族そろってにぎやかに雑魚寝するというような育ち方はしなかったはずである（結婚生活の形態を考える上でも、夕霧と雲居雁の家庭生活の詳細な描写は貴重な資料であろう）。母には誕生と同時に死別、父には「けけしうさし放ちて」（少女63）接されたという疎外感を味わい、祖母大宮の愛を一身に受けて育った夕霧であった。しかし、その夕霧が自身親となり、筒井筒の恋を交わせた雲居雁との間に七人もの子を設けて上述のようににぎやかに暮らしているのに、夕霧は自分の子ども時代にはなかった、家族水いらずの日常生活に満ち足りているように作者が描かないのはなぜであろうか。

小町谷照彦氏は「夕霧の落葉宮への傾斜は日常性からの離脱という契機によるもの」（注1）とするが、その通りであろう。かつて「野分」で父源氏と紫の上をひそかに垣間見し、「飽かぬことなき御さまどもなるを身にしむばかり」（258）鋭く感じとった夕霧であった。また、源氏と玉鬘の「戯れたまふけしき」（271）にも強い衝撃を受けている。それは幼い子どもの介在しない男と女の世界であった。以来、夕霧の心中には、現在の子沢山の雲居雁との日常にはないものに対する憧れが根強くあった（注2）とみるのは自然であろう。

### （夜泣きする赤ん坊）

ようやく寝入って、柏木の夢を見ていた夕霧の眠りを破ったのは「若君の寝おびれて泣きたまふ御声」であった。

この君いたく泣きたまひて、つだみなどしたまへば、乳母も起き騒ぎ、上も御殿油近く取りよせさせたまひて、耳はさみしてそそくりつくるひて、抱きてゐたまへり。（横笛348）

この赤ん坊の描写は、第一部に登場する子どもには決して見られなかった性質のものである。そもそも作り物語に登場する高貴な家柄の子どもは、「いとど、この世のものならず、きよら」（桐壺113）でありいつもにこにこ「笑ひがち」（葵70）で機嫌良く、「物をひきのぶるやうにおよすけたまふ」（若菜上103）と、成長の早いのが普通なのであった。しかし、この夕霧の赤ん坊はそうではなく、むずかっとお乳を吐く現実の等身大の赤ん坊として描かれている。ちなみに源氏物語中で激しくむずかる赤ん坊の例はここだけである。枕草子にはたびたびむずかる赤ん坊が登場する（注5）のと大きく異なっている。また、ここでの雲居雁の様子を小町谷氏は「第一部で幼な恋として清純な姿をのぞかせていた雲居雁も、ここでは日常的なもので風化されて家刀目的な存在として家庭生活に安住しきっていて全くみるかげもない」（注1）と、手厳しく評している。このあたり、雨夜の品定め「耳はさみがちに、美相なき家刀自の、ひとへにうちとけたる後見ばかり」（帚木139）をする妻が、左馬頭に酷評される場面が思い出される。

さらに宮田京子氏は「次々に生まれる大勢の子供の世話に追われて、風流のかけらも持ち合わせない母親の姿」（注6）と見る。宮田氏は雲

居雁や紫の上の継母の兵部卿の宮の北の方のように上流階級に属する多産の女には「母親の持つ生産的動物的強さ、たくましさ」がイメージされる」ことがあり、「子沢山の母親に、優雅な雰囲気欠如する」ことも指摘する。そして、そんな妻に寄り添って「いかなるぞ」と心配そうに子どもをのぞきこむ夕霧も普通の平凡な夫として描かれている。また、この夕霧像には、紫式部日記の寛弘五年の敦成親王誕生後の道長の姿なども重ねあわされているのであろう。権力者の男性の妻の世界の姿としても取れる描写である。実子を持つことのなかった源氏と紫の上の間では見られない姿でもあった。養女にした明石姫君（三歳）を紫の上が、「ふところに入れてうつくしげなる御乳をくぐたまひつつ戯れるたまへる御さま、見どころ多かり」（薄雲430）という描写は、一見似ているようであるが、内容的にはかけ離れていると感ずる。明石姫君はすでに愛らしい片言を話せるほどに成長しておりお乳を吐いたりはいしない。紫の上の描写も全集頭注に「この紫の上の姿態、女性の秘奥に触れる趣がある」と書かれている。所帯じみた雲居雁とは異なるエロチックな印象すら与える。多産の女（雲居雁）と不産女（紫の上）の比較をする上で、この二つの描写は甚だ興味深い。

さて、一条宮訪問直後の興奮さめやらぬ夕霧と、そんな夫が面白い雲居雁の不和の空気を反映するかのように（この赤ん坊の夜泣きの原因を、諸注は柏木の物の怪のせいとするが、それだけではなからうと感ずる。赤ん坊は家庭の不穏な空気を本能的に察知するものではないか）「まことにこの君なずみて、泣きむつかり明かしたまひつ」（349）と赤ん坊の機嫌は一晚中悪かった。ここには夫婦の心理のずれが、お互いが一対一で向き合うことによって修復されたり、或いは決定的破局に至ったりするような、男と女の緊張した関係の成立しがたい環境として

わす」とある。大体、雲居雁は派手に嫉妬はするが、子どもたちのせいで集中してそのことばかりを考えることができず、紫の上の如く内向して自らの健康を損ねてしまうことはない。森藤氏は雲居雁を「幼なじみで『まめ人』の男に添い、多くの子宝に恵まれ、子育てに追われる。この時代の女につきものの『つれづれ』とも無縁に、ましてものはかない身の嘆きもしらぬ」（注3）と評するが、その通りであろう。その雲居雁の子沢山の家刀自としての日常がこの後に活写されている。

女君は、君達におどろかされて、ゐざり出でたまふ（中略）君達ののあて遊びあひて雖つくり拾ひ据ゑて遊びたまふ、文読み、手習ひなど、さまざまにいとあはたし、小さき児這ひかかり引きしろへば、取りし文のことも思ひ出でたまはず。（416）

この部分の夕霧の子どもたちは、特に美しいとか、きよらだとか賛美して描かれることはなく幼い子の沢山いる貴族の家庭の日常が写實的にやや戯画化されて描かれている。「横笛」の笛をかじる薫や、夕霧に甘える匂宮の個性的な描写とは異質の平凡な、ひとかたまりの子どもの描写である点が注目される。

（×）御息所の死の前後は又、大人だけの世界の描写となり、重く暗く悲哀に満ちた雰囲気漂っている。

（○）次に雲居雁が又しても子どもとセットではんの一場面登場する。御息所死後に夕霧と落葉の宮の仲を疑って、子どもを文使いにして夕霧に歌を贈り、夕霧の本心を知ろうとする。ここでの歌のやりとりは、物

の子沢山の家庭の日常が見られる。夕霧が一条宮訪問で味わったロマンティックな心情の余韻も、雲居雁の嫉妬も、赤ん坊の泣き声に中断されてうやむやになってしまふ。夕霧は女三宮に逢った後の柏木のように感乱の時間に浸ることもできず、雲居雁は女三の宮降嫁後の紫の上のように苦悶の夜をおくることもない。ここでは子どもの泣き声が、大人たちの思いなどにお構いなしに割り込んできて全てに優先する。

## 二 「夕霧」の巻の構成―大人の世界と子どもの世界の交錯―

「夕霧」の巻を注意して読むと、ひっそりした大人だけの世界（落葉の宮のいる小野と、一条宮）と、にぎやかでざわざわした子どもたちのいる世界（三条殿と二条の大臣宅）が交互に描かれていることに気付かせられる。夕霧がこの二つの世界を行き来しつつ、悪戦苦闘するさまが辛口のユーモアを交えて語られている。子どもの登場する世界を○、登場しない世界を×としてみていきたい。

（×）「夕霧」の前半三分の一位までは、夕霧と落葉の宮、御息所を中心に話が進み、夕霧の家庭は前面には出てこない。つまり、幼い子どもの登場しない大人の世界が繰り広げられている。

（○）夕霧の文を読んだ御息所の容体の悪化の記述の後、話の舞台は漸く三条殿に移る。前夜夕霧が小野で落葉の宮と「実事なき一夜」を明かし、「千重にも思ひ重ねて嘆きたまふ」かたわらで、夫に関する情報を耳にした雲居雁は「知らぬやうにて君達もてあそび紛らしつつ」自分の居間で臥している。全集頭注には「子どもの世話で不快な気分を紛ら

語中では、この夫婦の結婚後初（藤裏葉以来）のものであり、二人がいかに和歌的世界から隔たっていたかを示すものでもある。しかも「はかなき紙の端に」書かれていたことが、緊張感の薄い間柄を象徴しているようでもある。夕霧の返歌はそれと似たものであり、雲居雁にもその隔心はわかり、却って嘆きが増すのであった。ここで雲居雁が自分たちの絆である子どもを仲介者に使ったことは何の効果もなかった。夕霧と雲居雁の子どもは、神通力を持つ特別の子どもではない。

（×）ついに夕霧は落葉の宮を小野から一条宮に連れ帰り、あるじ顔をして彼女に迫る。宮は抵抗し塗籠に隠れたため、思いを遂げられなかったが、二人の関係は周囲に知れわたり、人々（花散里、源氏）の様々な反応が描かれる。

（○）六条院で、花散里と源氏に会ったあと、「日たけて、殿にはわたりたまへり」と、夕霧は自邸に戻った。そこで彼を待ちうけていたのは「若君たちすぎすぎうつくしげにてまづはれ遊びたまふ」（457）という、大人の世界の男女問題と無関係の、別世界の生き物たちの歓迎であった。但し、雲居雁は「女君は、帳のうちに臥したまへり。入りたまへれども目も見あはせたまはず」（同）と、今までの彼女とは違った疎隔の態度を見せていた。役者が一枚上手の夕霧に懐柔されて、やや機嫌を直した雲居雁に、夕霧は自分たちの間の大勢の子どもたちのことを取り上げて、雲居雁の軽率な振る舞いを制止しようとする。

今は、かく憎みたまふとも、思し棄てつまじき人々いところせききまで数添ふめれば御心ひとつにもて離れたまふべくもあらず。

これは一種の脅迫である。夕霧は雲居雁への愛の深さを語る代わりに、今まで自分が雲居雁一辺倒の堅物すぎた反省と、こんなに子どもがいるのだから、今さら別れたりできる訳ありませんと、かなり高姿勢に出て雲居雁の不満を封じこめようとしている。子どもの存在は愛の確認のためではなく、夫婦が協力して後見せねばならぬ共有物として強調されるのである。

(X) 塗籠にこもった宮の抵抗にしびれを切らした夕霧は、小少将の手引きで中に入り、ついに実力行使に出、強引に契りを交わした。

(○) 事の成り行きを知った雲居雁は、「まめ人の心変わるはなごりなくなむ、と聞きしはまことなりけり」(467)と、今や現実を受け入れられないと思う。次に彼女の行った行動は、方違えにことつけて実家に行き、戻ってこないというきっぱりしたものであった。夕霧がかわって自宅に戻ると、子どもたちのうち姫君と、ごく小さい若君と一緒に連れて行き、若君の何人かが残っていて、帰ってきた父を「見つけてよろこび睦れ、あるは上を恋ひたてまつりて愁へ泣きたまふ」(468)という有り様であった。

第一部「真木柱」の髭黒一家の家庭争議が思い起こされる。ただし、「真木柱」では髭黒の三人の子どもたちが、それぞれ或る程度の個性を付与されて描かれていた。とくに真木柱はそうであった。それに比して夕霧の子どもたちは人数が七人と多いせいもあるが、一人一人の描きわけが殆どなく、十把ひとからげで泣いたり、甘えたりと、騒々しいばかりの子どもグループとしてのみ描かれている点が異なっている。

### 三 子沢山の父、夕霧の観察眼

冒頭で述べたように「横笛」「夕霧」の巻には多くの幼児の描写が目立つ。「横笛」の全集頭注にも「幼児たちのあどけない姿が精彩を放つ。この巻では初めに薫、途中では夕霧の子どもたち、終わりに二の宮、匂宮、薫というふうな子どもたちのしきりに活躍するのが注目される」(353)とある。ここで、注意したいのは「横笛」冒頭の笛をかじる薫の様子を観察するのが(外見上の)父源氏であるのを除くと、あとは全て夕霧の眼を通して語られ、それぞれの子供の比較がなされているという点である。

一、二で引用したように、夕霧が妻雲居雁や七人の子どもたちと同室でにぎやかに寝ている描写があった。さらに「夕霧」巻末に書かれているように藤内侍との間にも五人の子を設けている。合計十二人の父である。そのことは夕霧が子どもの生態というものを熟知していることを暗示していると思う。つまり子ども通の父親である夕霧の眼を通して皇子(二の宮・匂宮)たちや、表向きは源氏と女三宮の若君薫の個性が語られ、それぞれの子どもと比較がなされているのである。源氏の方は夕霧のように大勢の子どもたちと起居をとにもするという体験はない。また「小さきほどのち」をあまた見ねばにやあらむ」(横笛338)と、子どもの比較鑑賞に自信が持てないことをつぶやいているのと対照的な設定になっていることを意識すべきであろう。

一条宮から帰り、柏木の夢を赤ん坊の夜泣きでさまされた翌日夕霧は六条院に赴いた。明石女御の部屋で匂宮が「三つばかりにて中にうつくしくおはするを」(350)と、兄弟中でもとりわけ愛らしいことが語られる。その匂宮のあどけない中に宮らしい驕慢さの感じられるセリフ

さて、二条の大臣宅に迎えに向いた夕霧は、ここでも雲居雁を連れ戻すための説得に「今はかくくどくだしき人の数々のあはれなるを、かたみに見棄つべきにやは」(469)と、大勢の子どもたちの存在を強調している。森藤氏はこの部分を「彼(夕霧)は高を括っている。はじめての経験に何の知慧もない女は、結局は子の縁にひかれ、夫の嘯半分のなだめに従うしかない」(注3)と解釈する。雲居雁の怒りと抵抗は子の存在によって中途半端なものになってしまっているのであった。

夕霧は、新婚早々の落葉の宮のことも頭から離れず、雲居雁との家庭争議も容易に丸くおさめることもできず「もの懲りしぬべうおぼえたまふ」(470)と、いい加減うんざりしてきている。そんな中で、雲居雁が連れ出した幼い姫君を「いとあはれと見たてまつりたまひて、(夕霧)『母君の御教になかなひたまひそ』」と、自分の味方に引き込もうとはかる(傍線部全集頭注)。

髭黒が心底、真木柱を恋うたような父の情愛というものは、あまり夕霧には感じられない。大体、夕霧は七人の子どもたちを一人一人、区別して認識していたのかどうかもわからない。雲居雁と子どもたちは夕霧にとって、常にひとかたまりのにぎやかな家族という捉え方しかされていなかったのではないかとさえ思われる。のちに「竹河」で蔵人少将が夕霧と雲居雁の五男、もしくは六男と全集で注されるのは「横笛」「夕霧」での子どもたちの描き分けがなされていないためでもあるといえよう。また、夕霧と雲居雁の子ども中で、その後詳しく個性的に描かれるのはこの蔵人少将のみである。

「大将こそ、宮抱きたてまつりて、あなたへ率ておはせ」に思わず夕霧は微笑する。次に二の宮が「まろも大将に抱かれん」と、やってきて匂宮と夕霧の取り合いをする。源氏が匂宮の兄に対する負けず嫌いを冗談半分に非難すると、夕霧は「二の宮はこよなくこのかみごころにところ避りきこえたまふ御心深くなむおはしますめる。御年のほどよりは、恐ろしきまで見えさせたまふ」と、二の宮の兄らしい弟思いの性格をはめることも忘れない。これなど多数の男の子のいた夕霧が口にする、単に社交辞令とは思えぬ説得力のある評価に聞こえてくる。また、「横笛」「夕霧」では度々登場する夕霧の子どもたちに一度も直接のセリフがないことが逆に浮かび上がってくる。彼らの印象が薄く一人一人の個性が感じられないのは、この二人の宮たちのようにいきいきとした会話をする場面がないせいでもある。作者は夕霧の子どもたちを、この二人の宮たちのように子どもらしいわがまを發揮する、魅力たっぷりな愛すべき子どもたちとして描くことに力を入れたことが、それぞれの描写を比較することでわかってくる。そして、次に夕霧による薫の観察および宮たちとの比較がなされる。

「横笛」冒頭、柏木一周忌の春には「わずかに歩みなどしたまふほど」であった薫が、秋には前述の宮たちと「ひとつにまじりて遊びたまふ」ほどに成長している。夕霧は親友柏木と女三の宮の密通の疑念を明らかにしたい思いもあり、薫をじっくり観察しようとする。「御簾の隙よりさし出でたまへるに、花の枝の枯れて落ちたるをとりて、見せたてまつりて招きたまへば、走りおはしたり」(352)この部分、二歳(満一歳半)程度の赤ん坊の生態を実によくとらえた描写であると思う。先程の匂宮(薫より一歳年長―注7)や二の宮(全集頭注では数えの五、六歳)ほどの、赤ん坊の域を出た会話のできる幼児であつたら「枯れた花

の枝」で「おいでおいで」と手招きしても、はたして走りよってきたであろうか。子沢山の父夕霧は、薫位の赤ん坊が何にどう反応するかということ、体験から熟知していたと思われる。この箇所、なにげないところではあるが、式部の子ども描写としてもすぐれた部分であると思う。そして、夕霧の観察眼は直前に抱いたり、会話したりした二人の宮と比較しながら鋭く働くのであった。薫を間近に見ての感想は「皇子たちよりもこまかにをかしげにて、つぶつぶときよらなり」(352)というものであった。また「皇子たちは、思ひなしこそ気高けれ、世の常のうつくしきちごどもと見たまふに、この君は、いとあてなるものからさまことにをかしげなるを、見くらべたてまつりつ」(353)と、夕霧の評価は薫がきこまかで、だれとも違う美しさが備わっていて、それは皇子たち以上の美質ではないかというものであった。そして幼い薫に柏木の面影をまぎれもなく見出して、ますます源氏の心底を確かめたくもなった。さらに夕霧は「心ばへさへなつかしうあはれにてむつれ遊びたまへば、いとらうたくおぼゆ」(同)と、薫の性格にもひきつけられる。

このように子沢山の父夕霧は、我が子より罪の子薫の容姿・性格に強くひかれている。「横笛」の巻でもっとも魅力的に詳しく描かれている子どもは薫であるといつてよいであろう(注8)。そもそも源氏物語では、一方に大人の暗い秘密の世界が存在している時に、子どもの無邪気さが際立つという書き方がなされるという傾向があることを以前指摘した(注9)。後のライバル匂宮の幼児期の愛らしさが「横笛」「幻」の子どもらしいセリフに象徴されると異なり、薫は容姿や動作のみで他の追隨を許さない抜群の魅力をふりまいている。だが、次に十四歳になって「匂宮」に登場する薫は、出生に関する悩みを母にも気取られまい

#### 四 「夕霧」巻末の子の列挙の意味

「夕霧」の巻末は源氏物語中、唯一の子の列挙の記述が見られる。

この御腹(雲居雁)には、太郎君、三郎君、五郎君、六郎君、中の君、四の君、五の君とおはす。内侍(惟光女)は、大君、三の君、六の君、二郎君、四郎君とぞおはしける。すべて十二人が中にかたはなるなく、いとをかしげに、とりどりに生ひ出でたまひける。

(474)

このような末広りのめでたい子沢山ぶりの記述は、宇津保物語や落窪物語でお馴染みのものである。今西祐一郎氏は宇津保物語の「藤原の君」の類似箇所を引用し「煩わしいまでの叙述に見出される『生む』ということについての驚異的な楽天性」(注13)を指摘する。平井氏も幾つかの物語(宇津保物語・落窪物語・夜の寝覚・狭衣物語)を検討した結果「男女間に子が誕生することでの関係は前世からの宿縁と決定付けられ、また子の数に比例してその絆は一層強固になるといった観念が通用していたとみてよいであろう」(注12)と分析した。

両氏ともに、子の誕生を物語の中心人物たちの幸福と繁栄の証とする物語群と、「子を持たぬ光源氏と紫上との関係は伊勢物語の男と女とのそれに直系すると思われる」(注13)源氏物語との本質的相違に着目している。その源氏物語の中での、「夕霧」の巻の子の列挙は何を意味するのであろうか。子が夫婦の愛の「くさび」となりえず、いたずらに緊張感に欠けた日常を引きずって暮らしていかなばならない「ほだし」でしかありえない、家庭生活の現実に対する痛烈な風刺であろうか。平井氏は「源氏物語の中で夕霧の子沢山は(略)一種擲擲の対象にされており、

とする無邪気とは正反対の屈折した心理の持ち主となっている。夕霧の眼を通して語られる幼い薫のみずみずしい描写は、のちに喪失することによって一層価値あるものに感じられるのではないか。かつて「野分」で父源氏の女たちを見舞うという設定で、六条院の女たちを観察する役割を担われた夕霧(注10)であったが、「横笛」では子どもたちの観察者としての資格十分であり、第三部の主役となる人物たちの、無邪気な子ども時代の語り手として重要な役割を見事に果たしているといえるであろう。

二で(○、×)で区別してみてきたように、「夕霧」の巻は大人だけの世界と、子どもを交えた世界が交互に展開していく構造になっている。そして、夕霧の子どもたちは第一部に登場する子どもたちとは異なる印象を与える。即ち第一部での「若紫」や「紅葉賀」の少女紫の上は、夕顔事件や、わらはやみで「濁り疲れた」(注11)光源氏に対し、「澄んだ」(同)存在として登場し、清新な魅力をふりまいている。幼い東宮(冷泉帝)や、明石姫君もその無邪気な子どもらしい言動で、大人社会の重苦しい空気に新鮮な風を吹き込む役割を果たしていた。だが、「横笛」「夕霧」の夕霧の子どもたちは、もはやそのような子ども特有の魅力にあふれた子どもとして描かれていない。ここではとりあげなかったが源氏の唯一の実の娘、明石女御も多産であり、第二部で次々に子を産んでいる(若菜下)。平井仁子氏はこの源氏の二人の子どもの子沢山について「多くの子に恵まれたのと引換えに退屈な日常を得たに過ぎない」(注12)と見ている。作者は第二部に入って「平凡で現実的な家庭生活の中の子ども」をも描いてみせたのである。

源氏物語においては子沢山は決して美德とは描かれない」(注12)とする。先行作品の手放しともいえる子沢山礼讃とは一線を画する夕霧の子沢山描写には、子を持ち駒として末広りに上昇していこうとする貴族社会への作者の複雑で批判的な気持(注14)の一端がこめられているのだろう。

#### 五 紫の上との比較―子を持たぬ女の悲しみ―

前述のように常に子どもとワンセットでとらえられる結婚後の雲居雁と対照的なのが紫の上である。平井氏は「夕霧」の次の巻「御法」の紫の上の次の描写を引用している。

みずからの御心地には、この世に飽かぬことなく、うしろめたき絆だにまじらぬ御身なれば、あながちにかけとどめまほしき御命とも思されぬを、(479)

平井氏は「子のないことを悔やむより、絆がなくてよしとするあまりにも潔い言葉は、却って読者の胸を打つ」(注12)とするが私も同感である。藤本勝義氏もこの箇所を「自分の死に際し、後ろ髪を引かれる思いを抱くべき子孫が皆無ということ、かえってよしとする感懐ほど悲しいものがあるか。絆を残さぬ紫上の人生こそ、かえって悲惨さが際立ってくるのである」(注15)と夙に述べている。

「子の縁にひかれ(略)もろくも我を折ってしまった雲居雁は、はじめて世の女の辿る道を経験する」(注3)と、子の存在のために諦観せねばならない雲居雁のあわれと、上述した子を持たぬ紫の上の悲哀の両

方を作者は源氏物語の中で描いたのである。

大体、式部は平凡な家庭生活の幸福というものになんか懐疑的で、皮肉な見方をしていたようである。紫式部日記の次の叙述からもそのことが窺われる。

おのがじし家路と急ぐも、何ばかりの里人ぞはと思ひおくらる。  
わが身によせてははべらず、おほかたの世の有様（全集210）

今井源衛氏は「この述懐の中には、単にそのときの未亡人という境遇だけではなくて、結婚生活そのものが持っている凡俗性、あるいは夫婦の間の救いがたい違和感やお互いの孤独感というようなもののすべてが籠められているようであり、それは式部自身の結婚生活の中から知ったものだったと言えよう」（注16）という解釈をしているが至当であろう。また、高橋亨氏に物語の子どもの数の多寡に関して次のような指摘がある。「物語文学の発想の類型として、主人公は王統のひとり子として登場し、それが子女の多い副主人公的な人物と対置されているという事実がある。（中略）『王権』幻想を主題的に負うべき人物には子が少なく、俗なる『政権』に属する人物には子が多いと言ひ換えることができる」（注17）。夕霧の子沢山の設定もこのような観点からみると、源氏のライバル致仕大臣（かつての頭中将）の子沢山と同種のものとして位置づけられることになる。高橋氏の指摘の如く宇津保物語で、正頼に二・七人の子があるのに、主人公側といえる兼雅に三人、仲忠に二人しかいないことなども、典型的な例であろう。子沢山の夕霧の家庭争議の描写は、このように俗なる『政権』に属する人物の日常を、初めて類型的にでなくリアルに戯画化して描いたものとして評価すべきものである

たわけでは決してない」とある。

3 森藤侃子「女の宿世」『源氏物語―女たちの宿世』桜楓社・昭和五九年

4 後藤祥子「皇女の結婚」『源氏物語の史的空間』東京大学出版会  
昭和六一年

5 二五段「もの聞かむと思ふほどに泣くちご」・一五二段「夜泣きといふわざするちご」・一四五段「ものいはぬちごの泣き入りて乳も飲まず乳母の抱くにもやまで久しき」など（角川文庫『枕草子』）

6 宮田京子「多産の女―源氏物語の姉妹像を通して―」『平安文学論集』平成四年

7 匂宮は「若菜下」十二月誕生で、薫は「柏木」で翌春誕生なので数カ月しか差がないはずである。だが「横笛」での薫は会話の描写が皆無ということもあり、匂宮と成長差のある印象を与える描き方となっている。

8 仲田庸幸「光君と紫の君の幼時描写の文芸的意義」『源氏物語の文芸的研究』風間書房・昭和三七年「（横笛の薫を）若紫の雀の子の場面の紫の君の描写と共に、子供の描写としては双璧」とする。

関みさを「子どもに関する描写」『源氏物語の精神史的研究』白水社昭和十六年「（子どもの描写で）作者が最も心をこめて描写したと思われるのは、紫上と薫君とである―この二つの描写に通ずるのは非常に活発な生命感にあふれた一面である」とする。

9 拙稿「少女期の紫の上」『瞿麦』第八号・平成十年

10 後藤祥子「夕霧」『国文学』学燈社・昭和四三年五月「この巻（野分）で、夕霧は光源氏の世界に大きく一歩踏み込み、観察者になっている」

う。

おわりに

「横笛」「夕霧」の巻の子沢山の夕霧の家庭生活の描写は、今まで検討してきたように、他作品は勿論源氏物語中でも異色の現実を反映した写実的なものである。まめ人夕霧が、落葉の宮との恋に駆り立てられた要因として、子どもの介在しない男女の世界への憧れがあったことも明らかになった。また、子沢山の父夕霧の眼を通して自分の子どもたち、匂宮、二の宮、薫らの観察や比較がいきいきと的確になされていることが読みとれた。

さらに「夕霧」巻末の子の列挙は、源氏物語中ではむしろ例外的なものであり、宇津保物語などのように作者の心からの賞賛を示すものでないことは明白である。子のないヒロイン紫の上の孤絶した心情との対比において、末広がりの子沢山の描写の薄っぺらなおめでたさや、緊張感に欠ける退屈で雑然とした日常生活が浮かびあがってくる。それは式部の結婚生活や、宮仕えの体験から得られた実感でもあり、一種の普遍的真実であるともいえる。ゆえに、時代を越えて読者の共感を誘い、理想的に描かれた作り物語的世界の一面的な叙述とは別種の感動を与えるのであろう。

（注）

1 小町谷照彦「横笛」『源氏物語必携1』昭和五三年

2 伊藤博「野分の後―源氏物語第二部への胎動」『源氏物語の原点』明治書院・昭和五五年「（野分での）かの惑乱が夕霧の胸中から消滅し

とある。

伊藤博 注2と同「ここ（野分）に現出した夕霧の視点の意義は軽く見過ごせぬものがある」とする。

11 仲田庸幸 注7と同

12 平井仁子「源氏物語試論―子の意味を問う」『源氏物語の探究』十四輯・風間書房・平成一年

13 今西祐一郎「寡産の思想」『文学』昭和四八年八月

14 『紫式部日記』で道長が中務の宮（具平親王）の娘隆姫と、長男頼道の結婚を切望して、宮に縁のある式部に相談したことを「まことに心のうちは、思ひゐることおほかり」と、複雑な胸中をほのめかしていることなども脳裏に浮かんだ。

15 藤本勝義「不生女 紫上の論―源氏物語の深層読み―」『文学』昭和六十年三月

16 今井源衛「紫式部」吉川弘文館・昭和四八年

17 高橋亨「王権と恋」『源氏物語の対位法』東大出版会・昭和五七年